早春の古墳巡り

～三次盆地の古墳文化・

今、三次がおもしろい～

2004.03.07（SUN）

備陽史探訪の会古墳研究部会

今　日　の　日　程

平成１６年３月７日（日）晴れのはず

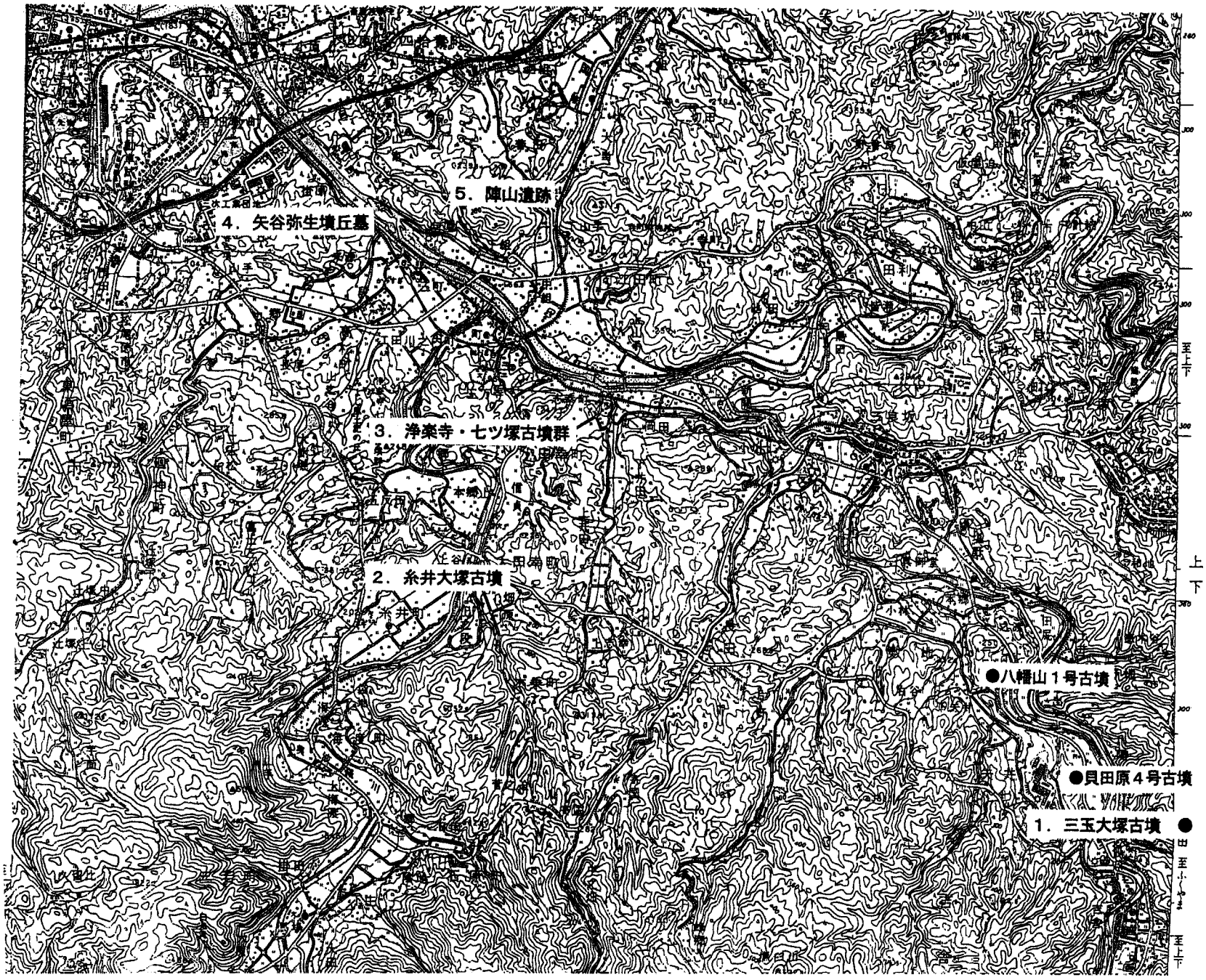
“おはようございます、今日一日よろしくお願いします。”

８：３０　福山駅北口出発…上下・甲奴経由で吉舎町へ
↓　車中から南山第１号古墳見学
↓　トイレ休憩

１０：２０　吉舎町立歴史民俗資料館到着　トイレ
↓
１１：００　三玉大塚古墳見学
↓
１１：５０　糸井大塚古墳見学
↓
１２：２０　「三次風土記の丘（七ツ塚・浄楽寺古墳群）」到着　トイレ
↓　昼食・三次歴史民俗資料館見学・散策

１４：００　出発…午後の部の始まり！
↓
１４：０５　矢谷弥生墳丘墓見学
↓
１４：30　陣山遺跡見学
↓
１５：００　おみやげタイム：三次ワイナリー到着　トイレ
↓
１５：４５　三次出発…世羅・甲山経由で福山へ
↓　トイレ休憩

１７：３０　福山駅北口に帰福（お疲れ様でした。御参加、有り難うございました。）


5．陣山遺跡
4．矢谷弥生墳丘墓
3．浄楽寺・七ツ塚古墳群
2．糸井大塚古墳
●八幡山１号古墳
●貝田原４号古墳
1．三玉大塚古墳
至上下
上
下

備後の古墳見学にあたって

備後は吉備の後（しり）の国を意味し、吉備の一員ではあるが、むしろ吉備の周辺国の一つといった方がよい。弥生時代後期にはこの地域は、特殊器台、特殊壺の分布域の西限をなし、吉備の首長連合の一角をなしていた。ところが、古墳時代になると、この地域の、中枢から遠く離れた周辺という地政学的特質が文化の形成に大きな影響を及ぼすことになる。

さて、備後は備南と備北に大きく二分されるが、まず、前期には備南に古墳が集中する。その規模は小さく、首長墳としては、前方後円墳は石鎚権現五号古墳など墳長三〇メートル前後の数基があるだけ（最近、墳長約六〇メートルの前方後円墳、尾ノ上（おのうえ）古墳が発見された）で、主流は石鎚山一号古墳など径二〇～三〇メートルの円墳で占められる。ところが相対するように、備北では狭い谷平野に大迫山一号古墳（墳長四六メートル）、辰の口古墳（墳長七七メートル）という、大形の前方後円墳が相次いで築造される。また、中期になっても、備南では大形古墳が目立たず、小規模な群小古墳が主体であるが、備北では糸井大塚古墳、三玉大塚古墳など墳長四〇メートルを超える帆立貝形古墳が、数千基に及ぶ群小古墳を従える形で、いくつも築造される。この前期、中期の古墳の在り方は、吉備の大勢力を牽制する畿内勢力の政治的、軍事的介入が、吉備周辺域である備後を舞台に繰り広げられた結果という見方も可能である。

後期になると、この地域全体がようやく政治的落ち着きを取り戻したようで、備南を中心に二子塚古墳、二塚古墳など巨大な横穴式石室をもつ大形古墳が多く築造される。一方、備北では八鳥塚谷横穴墓群など、地域的特色を醸し出す古墳がみられる。終末期の備南では畿内以外ではあまり例をみない、猪の子古墳、尾市古墳など横口式石槨（せっかく）をもつ古墳がいくつも点在するという、興味深い展開を見せる。

読者の皆さんは何を疑うこともなく、備後は吉備の一員と考えられているかもしれないが、備後の南北間の相互補完的な古墳分布の様相をみると、案外そうでもないことを思い始めるかもしれない。備後がそうした一面も併せもっていることを、是非とも自分の足で歩いて確かめて欲しい。

考古学は英語でarchaeology、アルケオロジーに通じる。

（古瀬清秀）

		三　次	庄　原	東　城	芦田川流域	松永湾
		陣山遺跡 矢谷弥生墳丘墓				
前期	四世紀			大迫山古墳 辰口古墳	蔵王原遺跡 潮崎山古墳 ●石鎚山古墳群	
中期	五世紀	●岩脇 八幡山1号 糸井大塚古墳 若宮古墳 三玉大塚古墳 ●浄楽寺12号 貝田原4号古墳 酒屋高塚古墳	甲山古墳 旧寺古墳 瓢山古墳		掛迫六号墳 ●亀山一号古墳 イコーカ山古墳	大元山古墳 黒崎古墳 松本古墳
後期	六世紀		矢崎古墳 明賀古墳		●山の神古墳 二子塚古墳 二塚古墳	
終末期	七世紀		●篠津原3号		■大坊 ■大迫古墳 ■大佐山白塚 猪子古墳 尾市古墳	

三　玉　大　塚　古　墳

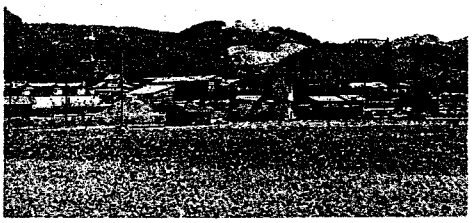
位置　双三郡吉舎町字三玉。

概要　東から西へ延びる丘陵尾根先端部に位置する。標高約280m、麓の平地からの比高約70mに立地する。北側の丘陵先端部に造り出しをもつ全長41mの帆立貝形古墳で、円丘部の直径約33m、高さ８m、造り出し部は幅15m、高さ2.2mの規模がある。1903(明治36)年に円丘部頂部から竪穴式石室が発見され、石室内より鋸歯文鏡(きょしもんきょう)、珠文鏡、管玉、滑石製小玉、有孔円板、筒形銅器(つつがたどうき)、鉄刀、鉄鏃片、鉄斧、短甲、兜、くつわ、砥石、馬具片などが出土した。その後、1980(昭和55)～82(昭和57)年には環境整備に伴う発掘が行われ、墳丘の外部施設や埋葬施設の墓壙の状態などが明らかにされた。墳丘の周囲には幅約３mの周溝があり、その外側には外堤がめぐっている。葺石は鉢巻状に３段にめぐらされている。そして３段目の葺石の高さと造出し部の高さが同じになるように企画されている。埋葬施設の竪穴式石室は円丘部頂部にある。明治年間の発見時に大きく破壊されているため規模、構造など不明であるが、墓壙から推測すると石室の規模は内法で長さ3.6m，幅1.2m前後であったとみられる。また、墳丘上からは須恵器、埴輪片がみつかっている。須恵器は小型椀形土器、碗、壺、甕などがあり、形態的に古式のものである。埴輪には円筒、朝顔、形象埴輪(馬形、家形、衣蓋)がある。三次地方で最大級の古墳で、出土遺物から５世紀後半ごろに築かれた古墳と推定される。

(河瀬)

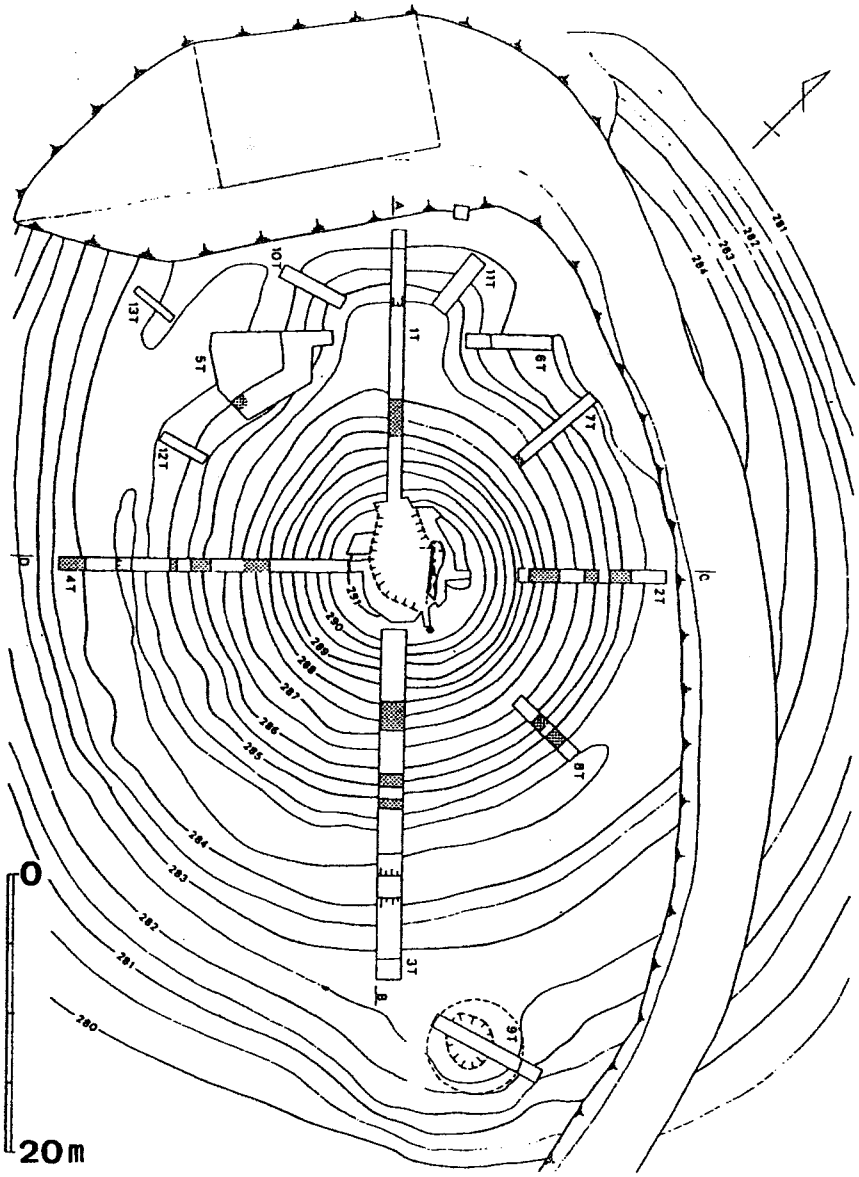
文献　広島県双三郡吉舎町教育委員会『三玉大塚－調査と整備－』1983。

交通　ＪＲ福塩線吉舎駅下車。東南側の吉舎中学校、テレビ中継所方向へ徒歩30分。テレビ中継所のある丘陵頂上。車の場合は丘陵南側から登ると便利。



△古墳遠景(北西より)

（みたまおおつか古墳）



△墳丘地形測量図（『三玉大塚古墳』より）
北西部に造り出し部、円丘部直径は約33m。

糸井大塚古墳

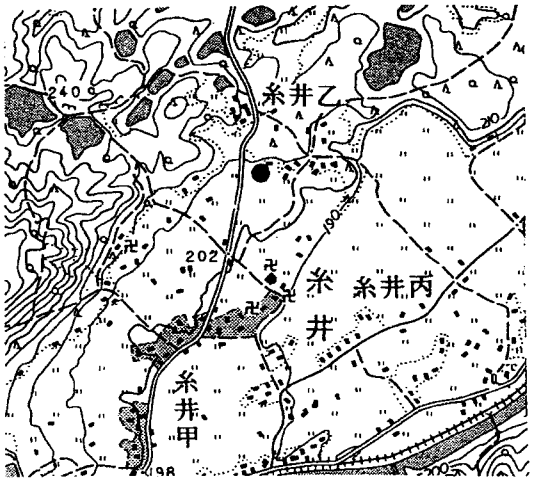
位置　三次市糸井町塚の本。

概要　糸井大塚(糸井塚の本１号)古墳は、三次市街地の東南約10Kmの糸井町の標高約200mの美波羅川が形成した河岸段丘上に立地する。現地は、周囲を低い丘陵にかこまれた小規模な盆地の西端部にあたっている。付近一帯はすでに水田として開かれており、古墳も現在では、水田中にとりのこされた独立丘陵状を呈している。古墳の北側および国道をはさんだ西側丘陵上には、10数基の古墳があり、また、東南部の美波羅川の東側の丘陵上には、内行花文鏡や琴柱形石製品などの出土した畑原(はたけばら)開山(かいざん)古墳群なども位置する。

古墳は全長65m、高さ約10mの帆立貝式古墳で、周囲には幅約30mの周庭帯(しゅうていたい)がめぐらされており、三次地方では最大規模の古墳である。現在、周辺部は水田耕作によって年々削平されているが、古墳の周囲を円形にとりまく畦畔からみて、本来は径100～110mちかくにおよぶ古墳とみるべきであろう。内部主体は未調査のため明らかでないが、埴輪、葺石などの外表施設もととのっているらしい。築造時期も５世紀を下るものではないであろう。　(河瀬)

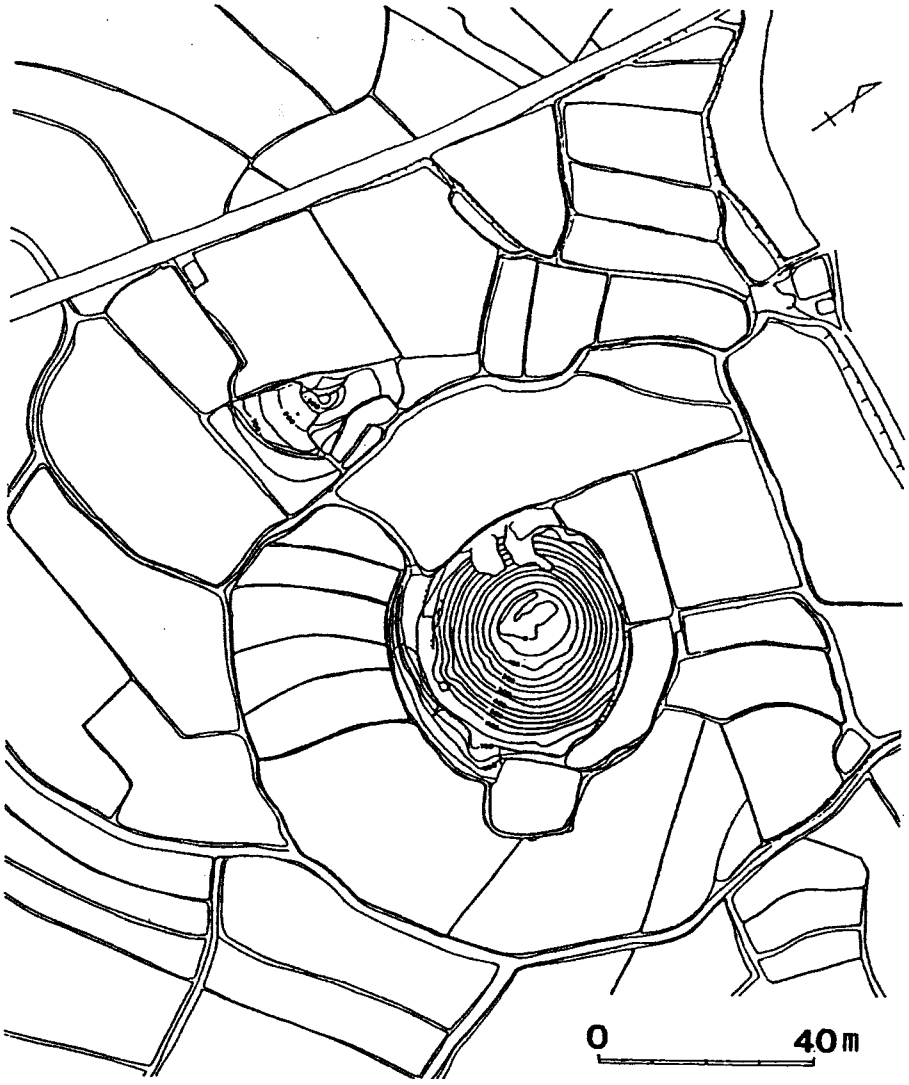
文献　広島県双三郡・三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡・三次市史料総覧』第５篇、1974。桑原隆博「三次地域における古墳の様相(1)－糸井大塚古墳－」『芸備』第16集、1986。

交通　ＪＲ芸備線三次駅下車。芸陽バス三次－滝の市、敷名線糸井池上下車。または、三次－小国線(廻神経由)糸井下車。国道375号線の東側水田中。



(吉舎)

（いといおおつか古墳）



△墳丘地形測量図（『芸備』第16集より）

県内最大規模クラスの造り出し付き円墳（全長約65m）。墳丘周囲は現在水田となっているが、円形に周庭帯（幅約30m）が存在しているのがわかる。西側の陪墳は、1987年に発掘調査されているが、主体部については不明であった。

浄楽寺・七ッ塚古墳群(1)

位置　三次市高杉町、小田幸町、江田川之内町。

概要　本古墳群は「みよし風土記の丘」内に整備されている県内最大規模の古墳群で、浄楽寺と七ッ塚の二つの古墳群からなっている。

古墳群は馬洗川の支流美波羅(みはら)川左岸の低丘陵上に分布している。国道375号線から風土記の丘公園に入ると広島県立歴史民俗資料館があり、三次地方だけでなく、県内全体の考古資料が展示、説明されている。資料館付近には移築復原した竪穴住居や古墳の石室があり、見学ができる。資料館から北東の小高い丘周辺に群在するのが七ッ塚古墳群であり、ここからさらに北へ下ったあたりに集中しているのが浄楽寺古墳群で、合計172基の古墳群が形成されている。

浄楽寺古墳群は、帆立貝形前方後円墳２基、方墳４基、円墳112基で構成され、この地域最大の群集状態を示している。そのうち、１号、12号、37号、61号、63号の各古墳は1954年に広島大学を中心に発掘調査され、概報が出されてはいるが、詳細を知るための本報告が待たれる。

１号古墳は全長約29.5mの帆立貝形の前方後円墳で、後円部に箱式石棺が存在していたようであるが、発掘調査時には確認されていない。１号古墳の北東方向に比較的大きな円墳がみえるのが37号古墳で、直径約30m、高さ３mの規模である。墳頂には長さ約３mの箱式石棺があり、見学可能である。ここから遊歩道を北へ進むと、左手に直径45m、高さ６mの大円墳がある。これが12号古墳で、浄楽寺・七ッ塚古墳群中最大の墳丘規模をもっている。墳頂には２基の粘土槨があったようで、また、墳頂および墳裾には埴輪がめぐらされていたとされている。主体部は見学できないが、墳丘斜面には葺石を観察することができる。　（脇坂）

文献　松崎寿和「常楽寺古墳群調査報告」『広島県双三郡・三次市史料総覧』第１篇、1956。潮見浩監修『広島県双三郡・三次市史料総覧』第５篇、1974。

交通　芸陽バス三次－世羅西線(廻神経由)風土記の丘入口下車。ＪＲ福塩線神杉(かみすぎ)駅下車。南へ徒歩10分。浄見寺南側丘陵が浄楽寺古墳群。

浄楽寺・七ッ塚古墳群(2)

位置　三次市高杉町、小田幸町、江田川之内町。

概要　広島県立歴史民俗資料館の背後丘陵頂部付近に群在する七ッ塚古墳群は、3基の前方後円墳を含むが、ほとんどが円墳で、計54基で構成されている。前方後円墳は9号、10号、11号古墳で、これらは互いに近接して存在するが、主軸の向きは必ずしも規則性はないようである。

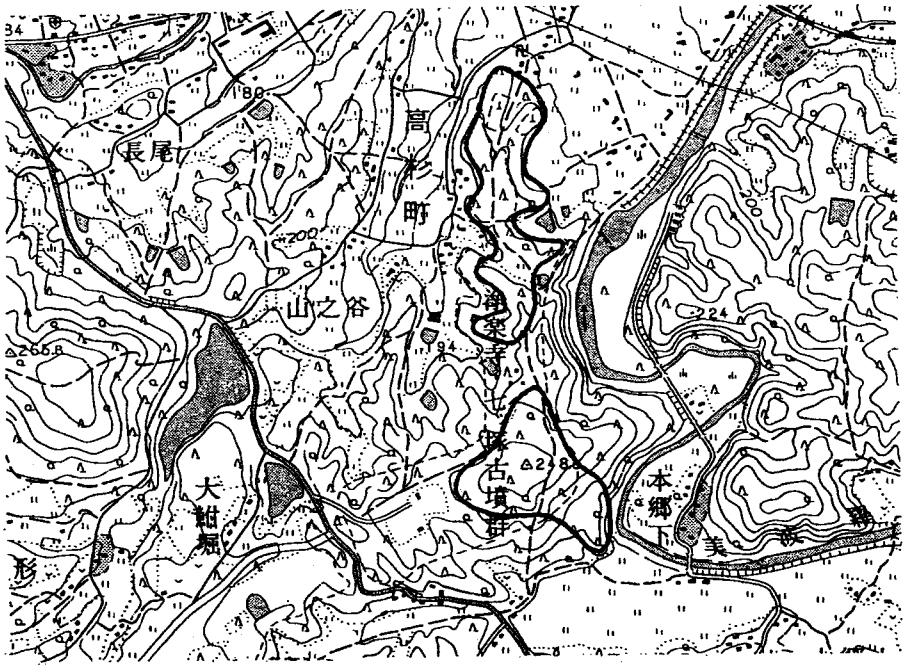
9号古墳は前方後円墳のなかでは最大規模をなし、全長約30m、後円部径18m、前方部前幅15mを測る。10号、11号は帆立貝形をなすようである。これらの古墳の南側にひときわ大きな封土をもつ円墳がみえる。これが15号古墳で、直径約28m、高さ約4mの規模をなし、この古墳群中最大規模クラスである。これらの大型古墳については発掘調査がなされておらず、埋葬主体部については明らかでない。

以上のように、七ッ塚古墳群の中心は9～11号、15号古墳のあたりにあったと考えられるが、これらとやや離れた別の位置にも古墳群が形成されている。15号古墳の東側に比較的大きな円墳の26号古墳があり、その東方に、丘陵を南側へ下る散歩道があって、七ッ塚40号墳の標示がある。この道を4～5分下って行くと、40号古墳を最大とした古墳群が存在する。ここには計13基の古墳の存在が示されているが、現状では40号古墳とその南側に5基の小円墳を見学することができる。40号古墳は15号古墳とほぼ同規模の大円墳であるが、ここの古墳群では、南側の2基が横穴式石室らしいことが注目される。いずれも天井石と考えられる大石が露出している。浄楽寺・七ッ塚古墳群では現在のところ、横穴式石室を主体としたものはここしかなく、古墳群形成の動きを知るうえで重要な存在である。

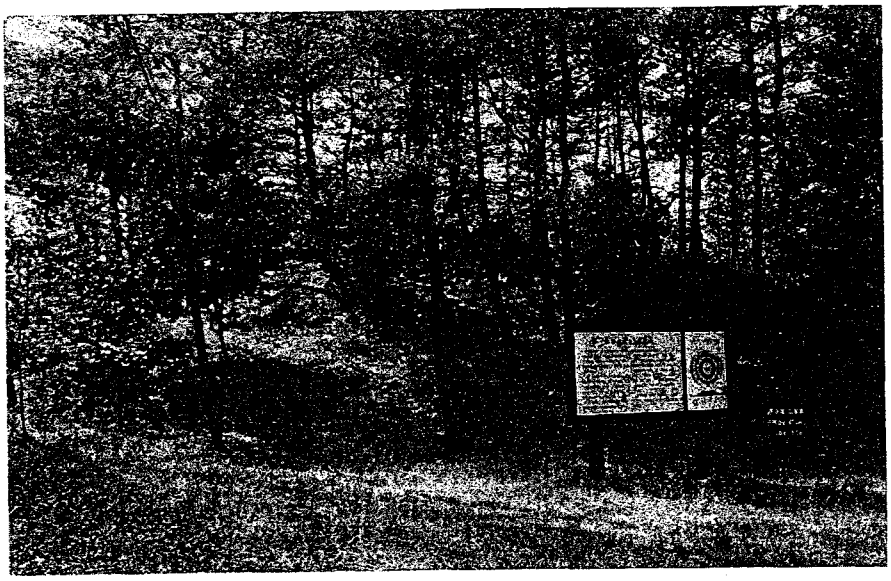
（脇坂）

△浄楽寺12号古墳の墳丘東斜面の葺石

（じょうらくじななつづか古墳群）



（三良坂）



△浄楽寺12号古墳全景(県内最大クラスの円墳、直径45m)

矢谷古墳

位置　三次市東酒屋町松ヶ迫。

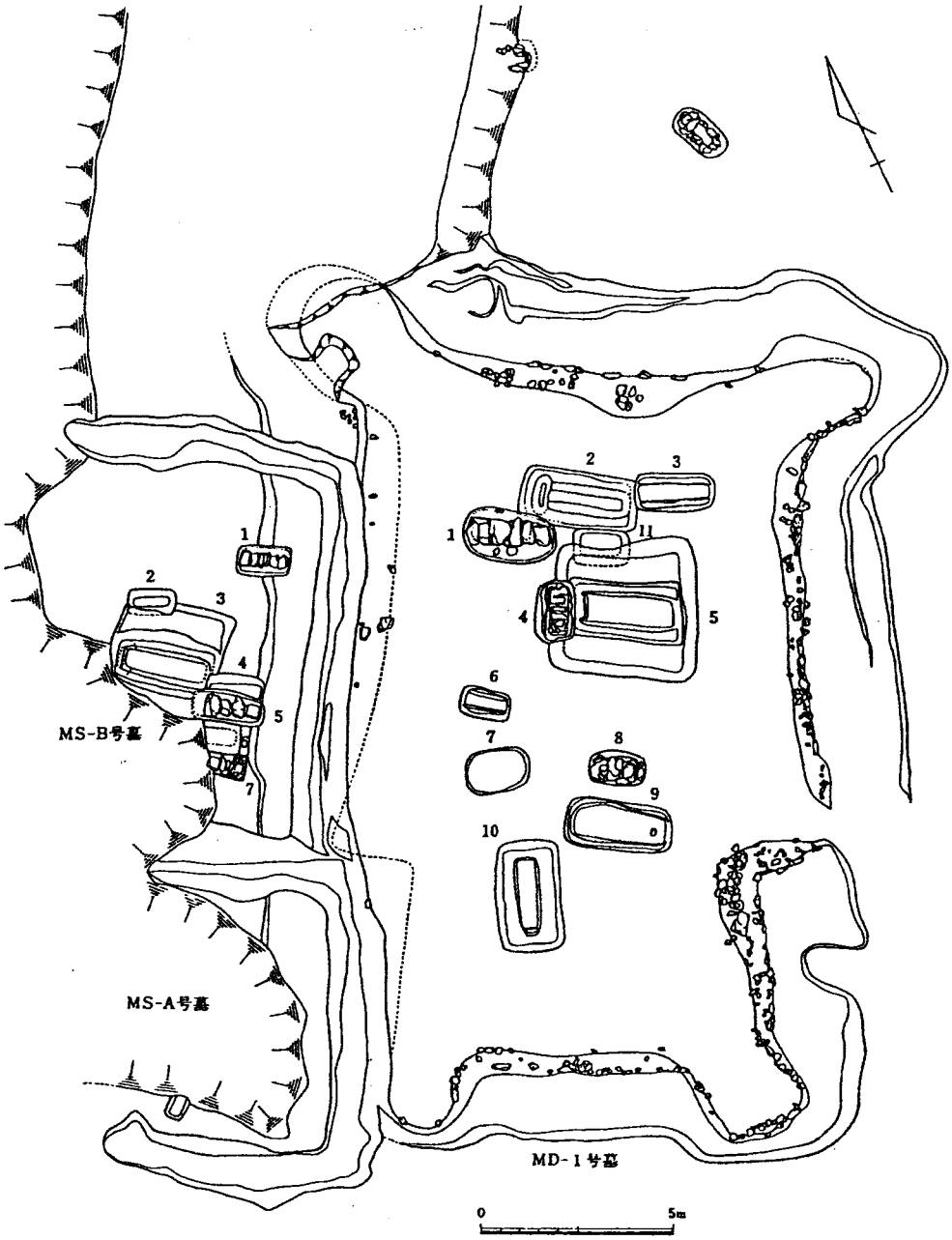
概要　標高約220m、比高約30mの南から北へ延びる丘陵尾根上に位置する。1976(昭和51)年に工業団地造成に先立って調査された。墳墓は丘陵尾根上の自然の高まり部分を削り出し、その上に盛土してつくっている。墳形は前方後方形をなし、その四隅に突出部を造り出した四隅突出形墳丘墓(よすみとっしゅつがたふんきゅうぼ)と呼ばれる特異な形の墳墓である。北東から南西に主軸をとり、墳丘の規模は全長18.5m、前方部の幅6m、後方部の長さ12.5mで、周囲には幅1.5～2m、深さ0.2m前後の浅い溝がめぐっている。墳丘裾には列石があり、墳丘の下方斜面には貼り石をほどこし墓域としている。埋葬施設は、後方部の中央に位置する長さ3.85m、幅3.9mの正方形に近い二段土壙墓を中心として前方部と後方部に築かれた箱式石棺、箱形木棺、割竹形木棺、土壙墓など11基で構成されている。副葬品にはガラス小玉、管玉、刀子、鉇などがあり、また、後方部中央の中心の土壙墓の上面からは角礫群とともに鼓形器台(つづみがたきだい)、注口壺、特殊器台、脚付坏などが出土し、墳丘裾部や周溝内からも丹塗りの大型特殊壺や器台、鼓形器台、注口壺、高坏などがみつかっている。これらの出土土器群は、埋葬儀礼のために供献された祭祀用土器と考えられる。この墳墓は埋葬施設や出土遺物から出雲や吉備中枢部の豪族と密接な関係をもった首長墓とみられ、弥生時代終末から古墳時代初頭につくられたものと推定される。(河瀬)

文献　広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981。加藤光臣「広島県三次市松ヶ迫矢谷墳墓群の調査ー四隅突出型前方後方形墓を中心にー」『考古学ジャーナル』No.151、1978。

交通　芸陽バス三次ー三若線三次工業団地入口下車。工業団地内に塔状に保存されている。復原整備済み。バス停から徒歩5分。車の場合は、中国自動車道三次インター前から国道375号線を東進すると、約3分で工業団地入口に至る。

備考　出土遺物の特殊器台などは、「みよし風土記の丘」内の広島県立歴史民俗資料館に展示。

（やだに古墳）



△墳丘実測図(『考古学ジャーナル』No.151より)

陣山遺跡

位置：今回確認した５基の墳丘墓は、全て標高２２６～２２８ｍの丘陵尾根東側に緩やかに傾斜し始める箇所で検出したもので、試掘調査未実施の場所で調査中に発見したものである。

墳丘：５基の墳丘墓は丘陵東側の地山面をほぼ垂直に削ることにより墳丘に伴う周溝を造り、地山整形と盛土により突出部や墳丘頂部を形成し、さらに周囲に貼石、列石や突出等を施すことにより各墳墓の墓域を明確にしている四隅突出型墳丘墓群である。墓域は１号墓と２～５号墓とに大きく２区画に分かれる。全ての墳丘は長方形又は台形を呈し、その規模は長軸 4.5～12.7m、短軸 2.9～6.3m、高さ 0.3～0.4mで２号墓が最大で５号墓が最小である。

埋葬施設：埋葬施設の調査は現状保存が決定した後に行ったため、そのほとんどが墳丘上の表面調査およびトレンチ調査によるものである。各墳墓の埋葬施設の数は１号墓は２基、２号墓９基、３号墓２基、４号墓３基、５号墓１基の計１７基である。２号墓の埋葬施設内の内２基についてはその性格を把握するため実際に掘って確認し、両者とも木棺墓と判明した。

貼石：５基の墳丘墓全てに貼石を施している。残存状態により築造当初はどの墳丘墓も全て貼石を施していたものと考えられ、それも西側より東側の貼石面に比較的大きめの自然石を使用している。

列石：列石を有するものは１・２・３号墓で、列石を有しないものは４・５号墓である。１・２号墓はほぼ全辺に列石をもつと考えられるが、２号墓は東辺のものは墳丘内に弯曲する状態に比較的大きめの列石を配置しており、西側張り出し状施設付近には列石は配置していない。３号墓は東辺にのみ拳大の列石を配置している。

四隅の状況：２号墓は隅の意識はしているが突出させていない、他の墳丘墓は全て明らかに隅部を突出させている。

周溝：各墳丘墓で周溝を確認したが、四辺全てに周溝を確認したわけではなく主として東側斜面を除く各辺で確認した。また、同一辺における列石の有無と周溝の有無は特に関係がないように考えられる。

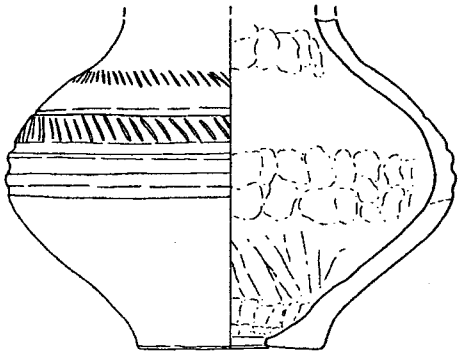
出土遺物：全ての墳丘墓から弥生中期後葉から後期前葉の弥生式土器（塩町式土

器）が出土している。その大部分が西側又は南北の周溝内や犬走り状平坦面からの出土であり、墳丘上及び墳丘東側からの出土はほとんど見られない。遺物の種類としては、壺、甕、高坏等が出土している。特に甕については底部穿孔しているものと、そうでないものがある。

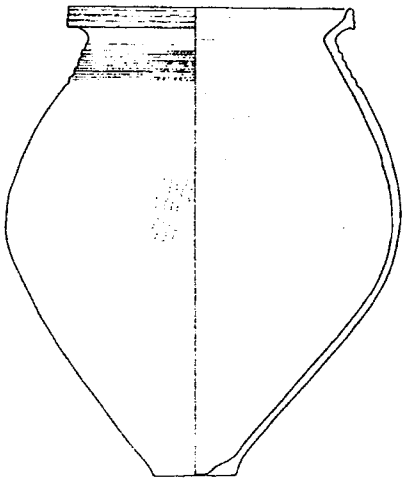
築造年代：出土した塩町式土器等から弥生時代中期後葉頃の築造と考えられる。大きく２区画に分けられるこれらの墳丘墓は１号墓→２・３号墓…？…４号墓→５号墓の順序で築造されたが、３号墓と４号墓については下層の切り合い関係が不明なため築造順は不明である。

まとめ：今回調査した５基の四隅突出型墳丘墓は、そのどの墳墓からも塩町式土器が出土していることや墓域を区画することにより同一墓域内に規則正しく企画性を持って各墳墓を配列していることなどから考え、限られた期間内にこれらの墳墓が造られたものと想定される。このような築造期間においても墳丘の規模、貼石の方法、列石の有無、四隅の石の配列の方法や突出の仕方、周溝や犬走り状平坦面の有無、張り出し施設の有無などに違いが認められ、また各墳墓の主軸が東西・南北と交互に造られている。すなわち、同一区画内にごく短期間に異なる形式で造られていることは、この期間にはまだ墳墓の築造形態が定型化していなかったものと考えられる。また、全ての墳墓が丘陵尾根の稜線よりも東側の一段低い位置に造られていることは、ある方向からの関心を意識しているものと考えられ、この時代におけるこの種の墳墓の築造方法のあり方に深い関心を抱かせる。

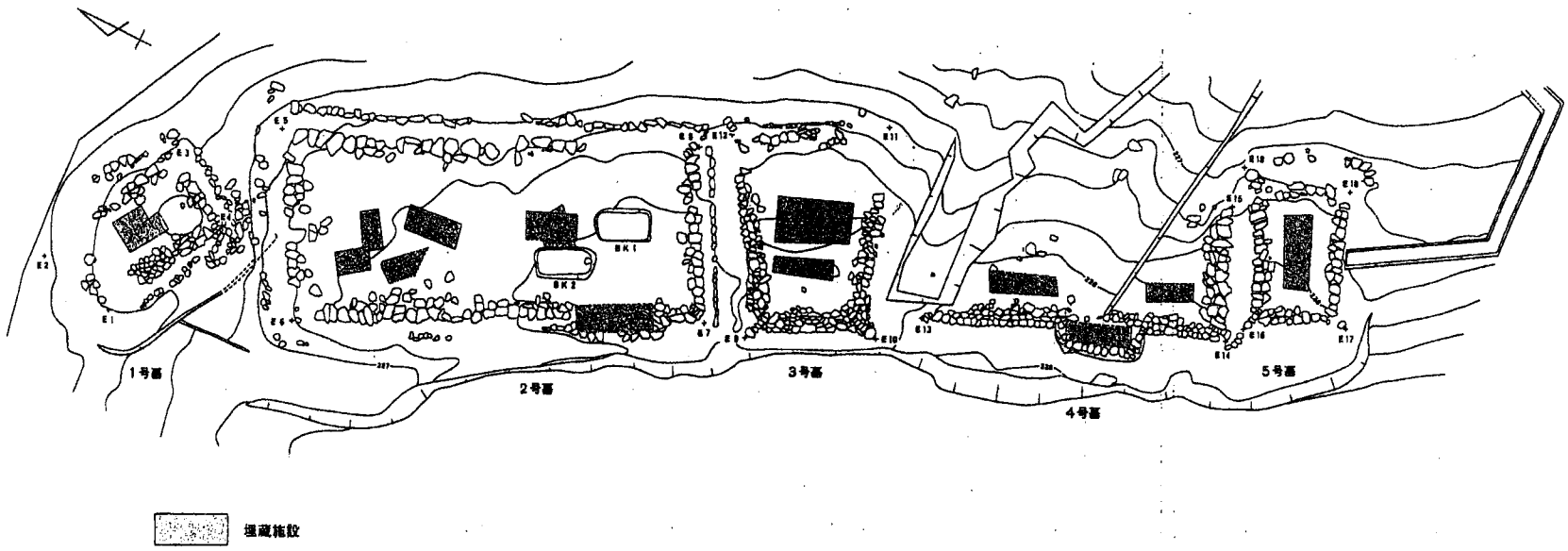
（以上「『陣山遺跡発掘調査報告書』　三次市教育委員会　1996」より抜粋）



壺実測図（１：２）



甕実測図（１：４）



陣山1～5号墓遺構平面図（1：125）

付録

自家用車で是非訪ねてみたい古墳

八幡山1号古墳

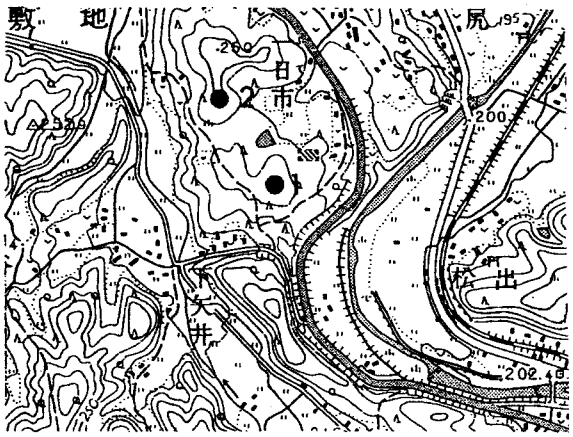
位置　双三郡吉舎町敷地下矢井。

概要　古墳は標高約250m、比高約30mの丘陵尾根上に位置する帆立貝式古墳である。吉舎町は三次盆地の東南部で、江の川の支流馬洗川の中流域にあたり、周囲には標高300～400m、比高30～100mの低丘陵が川に向ってのびている。付近に所在する古墳の大部分のものは、この低い丘陵尾根上に分布しているといってよい。鏡、玉類、短甲など多くの副葬品が発見された三玉大塚古墳(P.142参照)が本古墳の東南約2Kmの丘陵頂部に位置しているほか、海田原古墳群(P.140参照)、矢ノ地古墳群などが周辺の丘陵上に分布している。

本古墳は全長約45m、高さ約6mの墳丘で、吉舎町では海田原4号古墳とともに大型であり、周囲には幅約10mの周濠がめぐっている。かつての盗掘のため、墳頂部には大きな盗掘壙がのこっている。内部主体は組合せ式の箱式石棺であったとされ、中から珠文鏡、鉄刀、鉄剣、甲冑などが出土したと伝えられているが、内容については現在では明らかにできない。1979(昭和54)年の広島大学考古学研究室の測量調査によれば、小規模な竪穴式石室を主体としていた可能性がつよいとされる。墳形・規模や遺物からみて、5世紀後半ごろの築造と推定される。　(河瀬)

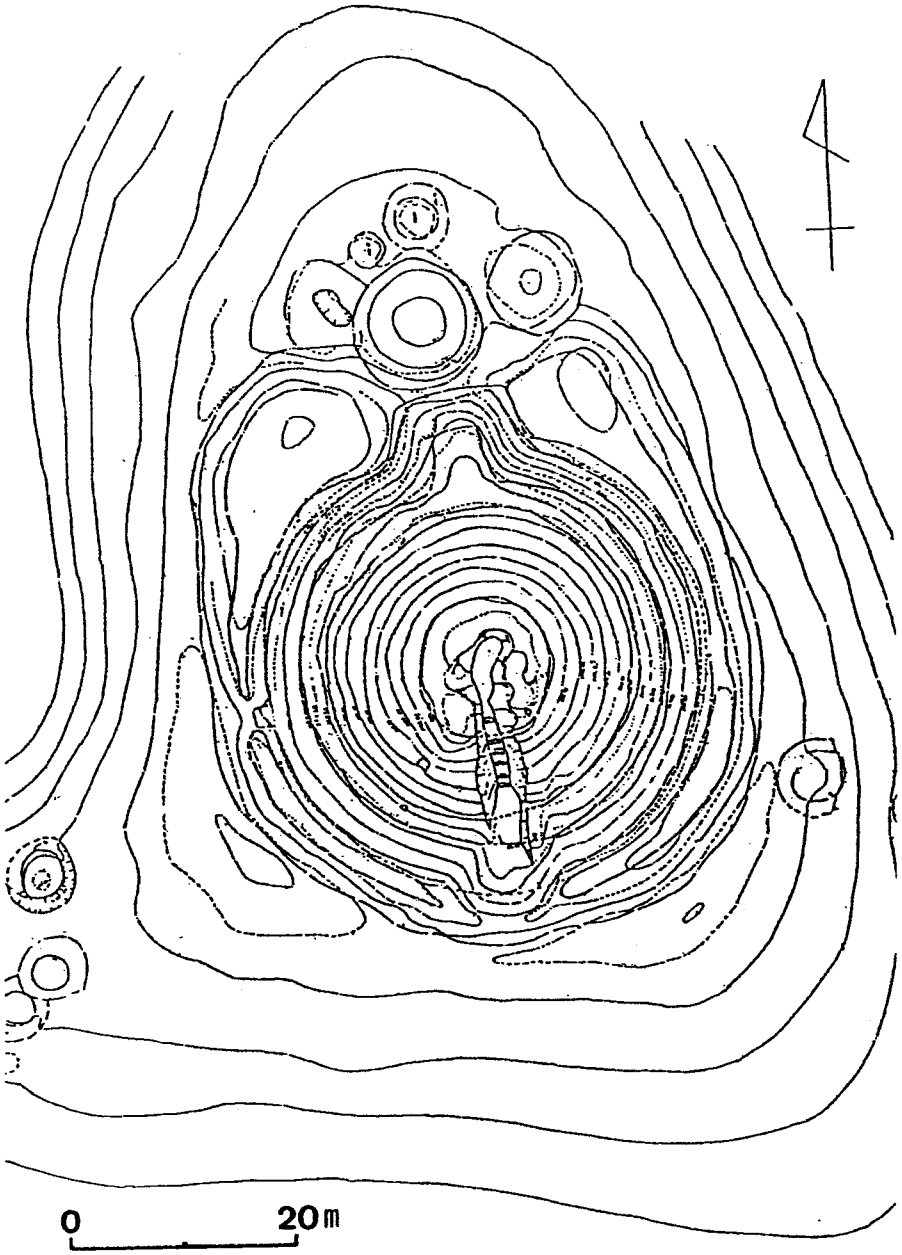
文献　高田明人、山崎やよい「双三郡吉舎町八幡山古墳測量雑感」『続トレンチ』第3巻、第1号、1979。広島大学文学部考古学研究室所蔵の地形測量図参照。

交通　JR福塩線吉舎駅下車。バス便なし。国道184号線の矢井別れから徒歩10分。



1.1号古墳　2.22号古墳　(吉舎)

（はちまんやま１号古墳）



△墳丘地形測量図（『続トレンチ』第３巻より）
円丘部直径約41m、北側に小さな造り出しが付設、造り出し部の東西にかなり広い周濠が存在する。主体部は大きく盗掘され不詳。

酒屋高塚古墳

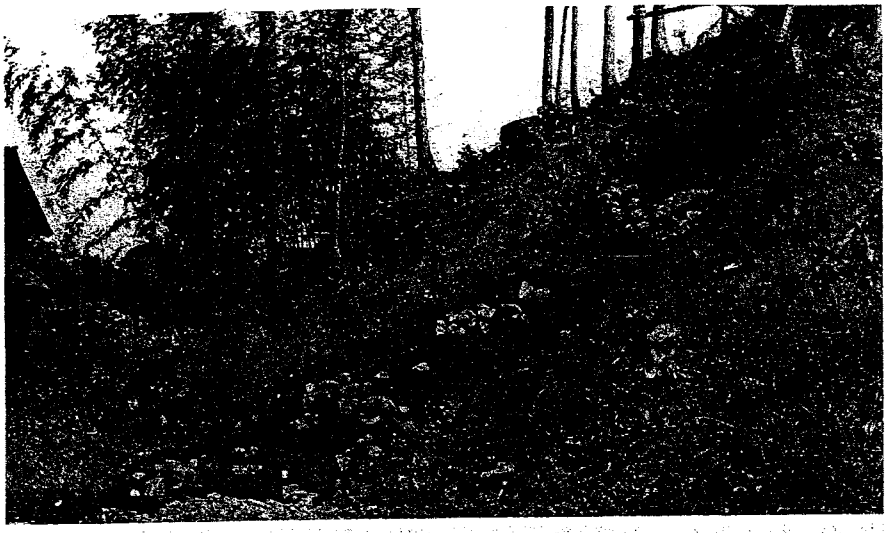
位置　三次市西酒屋町字高塚。

概要　西から東へ延びる丘陵先端部に位置する。南側には緩やかな谷あいの低平地がひろがっている。本来は全長46m。高さ約7.5mの円丘部の西側に幅７m、高さ２m、長さ10m前後の造出しをもった帆立貝形古墳であったとされるが、現在は墳丘の一部と造出し部が民家の建築や土取りのために削平されており円墳状を呈している。1982(昭和57)年の環境整備に伴う発掘により墳頂部に２基の埋葬施設が存在していたことが明らかになった。また、墳丘から葺石や埴輪なども発見された。墳丘頂部中央の竪穴式石室は1941(昭和16)年に盗掘を受け、石室石材の一部しか残っていないが、二段に掘り込まれた墓壙内に築かれていたらしい。石室内部から画文帯神獣鏡（がもんたいしんじゅうきょう）１面のほか鉄刀、鉄鏃、鉄釘などが出土している。画文帯神獣鏡は、熊本県江田船山古墳、三重県神前山古墳の出土鏡と同型鏡である。この中央石室の南に接するように1982年の調査で新たに一つの埋葬施設の竪穴式石室がみつかった。石室は長さ2.75m、幅0.85m、高さ0.5mの規模があり、石室内よりガラス小玉、滑石製小玉、碧玉製勾玉、鉄剣、鉄釘が出土した。石室の構造や出土遺物から５世紀後半から末ごろに築造された有力豪族の古墳と推定される。　（河瀬）

文献　広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』1983。松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第１巻、総説論、1961。

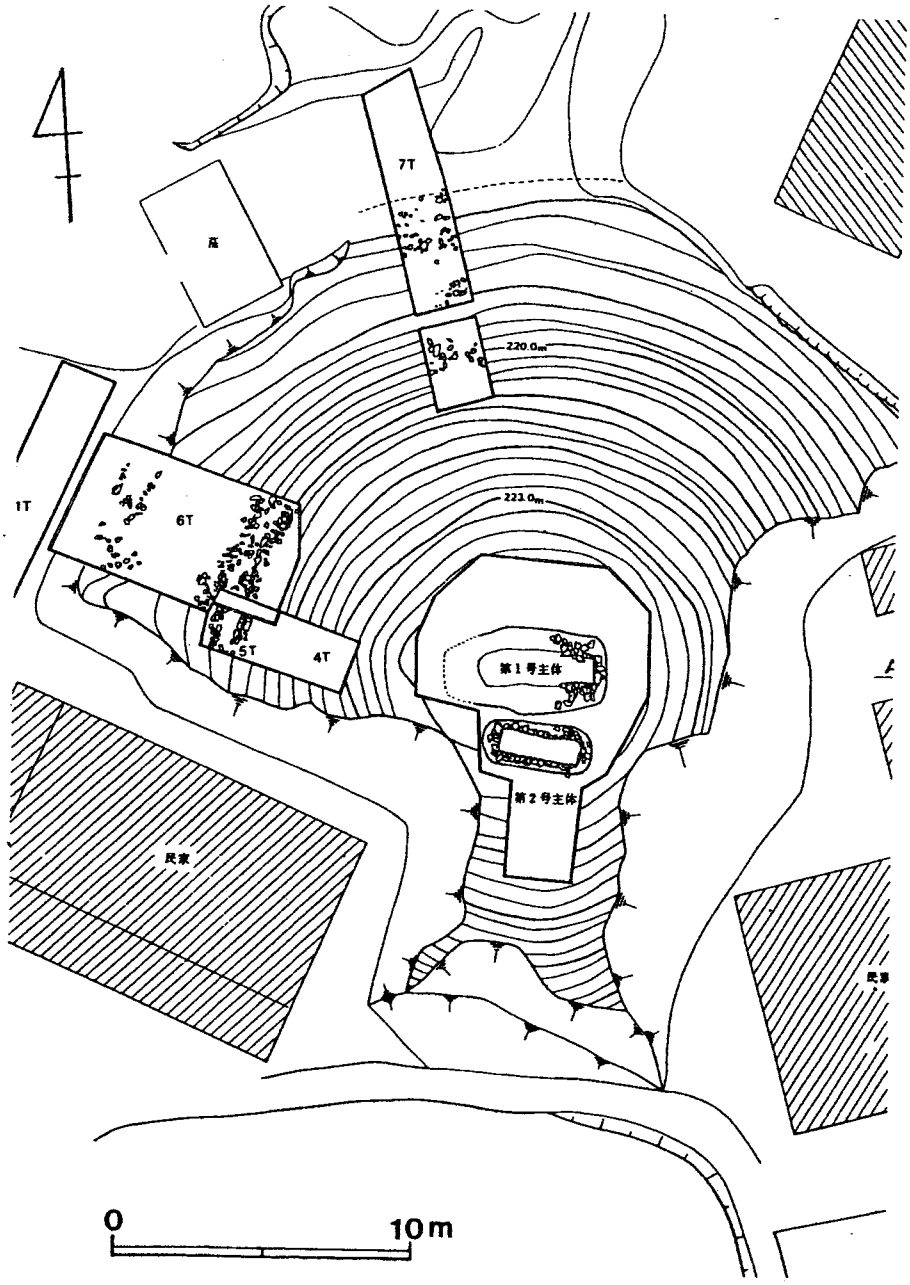
交通　芸陽バス三次ー三若線中国自動車道三次インター入口下車。広島方面（国道54号方向）への道を徒歩約20分。

（三次）



△墳丘葺石の発掘状態
▽出土の画文帯神獣鏡(直径20.8cm、1941年出土、京都大学蔵)

（さかやたかつか古墳）



△墳丘地形測量図（『酒屋高塚古墳』より）

円丘部直径34m、高さ7.5m、西側に造り出し部があったが、現在ではほとんど削りとられている。